

博士学位論文審査要旨

申請者：張 未未

最終学歴：早稲田大学教育学研究科博士後期課程教科教育学専攻退学

現職：東京大学グローバル教育センター日本語教育部門 助教

早稲田大学教育・総合科学学術院 非常勤講師

論文題目：日本語の雑談における「物語話段」の諸相一展開方法と表現特性に着目して一

申請学位：博士（学術）

審査員：主査 松木正恵 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

副査 仁科 明 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

副査 佐久間まゆみ 早稲田大学名誉教授

副査 ポリー・ザトラウスキー アメリカ・ミネソタ大学教授 博士（言語学・文学）

1. 本論文の目的と課題

本研究は、日本語の雑談における物語の談話分析を通して、話題の「つながり」と「まとまり」に基づく日本語の雑談の会話教育の方法を提示するものである。

20 世紀後半以降、異文化間コミュニケーションが盛んになるのに伴い、日本語学習者が日本語で雑談する機会も多くなったが、日本語学習者には、「日本人との雑談が続かない、人間関係が深まらない」という悩みが生じている。雑談は一見とりとめのない話の連続のようだが、その過程ではひとまとまりの物語がしばしば生じ、直前の文脈につながりながら話題の進展に貢献している。また、話を進める中で、参加者間で物語に対する意見や感想が活発に交わされ、参加者相互の価値観の交換や共有によって、物語が良好な人間関係の構築につながる可能性がある。従って、物語は、雑談の話題の展開とともに、参加者間の対人関係の維持に寄与することから、雑談における物語の話題のまとまりの展開方法と表現特性を解明することが、日本語学習者の悩みを解決するのに重要なのではないかと考えられる。

一方、日本語教育の現場では、「ストーリーテリング」などの一つの談話の「まとまり」に基づく会話教育は行われているが、話題相互の「つながり」と「まとまり」はあまり重視されていない。そこで本研究では、話題の「つながり」と「まとまり」に基づく日本語の雑談の会話教育を実践するために、佐久間（1995）による文章の随筆における「挿話文段」に相当する、雑談の「談話」と「発話」の中間に位置する、物語に関する話題のまとまりである「物語話段」を分析単位として、「文法論」の方法を取り入れながら「文章・談話論」の立場から分析する。具体的には、日本語母語場面と日中接触場面の雑談における日本語母語話者と日本語学習者による「物語話段」の展開方法と表現特性を、「物語話段」とその外部にある「先行話段」との話題の「つながり」と、「物語話段」内部の話題の「まとまり」という両面から比較して、特に学習者の抱える「雑談が続かない」といった問題点の原因を解明した結果を日本語の会話教育に応用する方法を考えることにした。

以上の目的を果たすために、本研究では、以下の3点の研究課題を設定した。

課題1 日本語の雑談における「物語話段」と「先行話段」との話題の「つながり」方を解明する。

課題 1-1 「物語話段」は、「先行話段」から話題を展開する上でどのような展開機能を果たしているのか。

課題 1-2 「先行話段」と「物語話段」をつなぐ表現にはどのようなものが、どのように使用されるのか。

課題 2 日本語の雑談における「物語話段」の話題の「まとめり」方を解明する。

課題 2-1 「物語話段」の物語に対する「評価発話」は、「物語話段」の話題を統括する上でどのような統括機能を果たしているのか。

課題 2-2 「物語話段」の物語に対する「評価発話」の表現は、どのように使用されるのか。

課題 3 日本語の雑談における「物語話段」の展開方法と表現特性の会話教育の方法を提案する。

課題 3-1 従来の日本語の雑談の会話教育において不足している点を補うどのような教育方法が提案できるのか。

課題 3-2 教育方法の提案を実現するための具体的な教授法は、どのようなものか。

2. 本論文の構成

本論文は、以下の全 10 章より構成される。

I. 序論	第 1 章 本研究の目的と課題
II. 本論	第 2 章 雑談における「物語」に関する先行研究
	第 3 章 本研究の位置付けと方法
	第 4 章 日本語の雑談における「物語話段」の基本類型
	第 5 章 「物語話段」の「話題展開機能」
	第 6 章 物語を開始する際の談話標識
	第 7 章 「物語話段」における「評価発話」の「統括機能」
	第 8 章 物語を評価する際の談話標識
第 9 章 「物語話段」の展開方法と表現特性に基づく日本語の雑談の教育方法	
III. 結論	第 10 章 本研究の結論と今後の課題

3. 本論文の概要

各章の概要は以下の通りである。

第 1 章 本研究の目的と課題

第 2 章 雑談における「物語」に関する先行研究

第 2 章では、日本語の雑談の談話分析に関する先行研究、雑談における「物語」に関する先行研究を概観した上で、日本語の雑談の会話教育の問題点を検討した。

日本語の雑談の話題展開に関する先行研究によって、話題展開の型と話題を展開する際の言語・非言語行動が明らかにされた（中井 2003、河内 2003, 2009 等）。しかし、日本語学習者による「話題を広げたい、深めたい」という要望に応えるには、異なる話題へと展開させるテクニックではなく、先行文脈を有効に利用して、話題を広げて、深める方法を見出すことが課題となる。その方法の一つとして、相対的に長く続き、参加者相互の経験や価値観を知り合う機会となる物語を雑談の談話に組み込んで、話題を展開させることが考えられる。

雑談における物語は、独話のタスクを遂行するストーリーテリングや、テレビ番組などで表現されるモノローグとは異なり、先行文脈に即して生成される（Jefferson, 1978）ため、話題展開上様々な機能を果たしているとされている（Tannen1984, 串田 2006 等）。また、参加者相互の意見や感想が活発に交わされることから、対人関係の構築と維持にも有効であるという（Maynard1989, Thompson & Hunston 2000 等）。しかし、従来の物語に関する研究は、ケーススタディに止まっており、どのような文脈で物語が生じやすいのか、また、どのような意見や

感想が述べられるのかについては、十分に明らかにされていない。また、日本語の雑談の会話教育への応用を考えるには、表現形式を提示する必要がある。とりわけ、従来の研究では、物語における実質的な言語表現の使用に焦点が当てられており、雑談の文脈に特有の、「談話標識」を主とする非実質的な言語要素の使用方法については、なお検討の余地がある。

一方で、過去 10 数年間に渡る雑談の会話教育の教材については、ほとんど語句や発話レベルの表現の提示に止まっている。また、日本語の雑談における物語の会話教育では、独話の形で練習させることはあるが、物語を雑談に自然に組み込んで話題を展開させることや、物語についての意見や感想を交換させることなど、雑談のより円滑な展開のための、話題の「つながり」と「まとまり」に基づく談話レベル、すなわち、話段レベルの学習はほとんどなされていないようである。物語を日本語の会話教育に生かすには、日本語の雑談における日本語母語話者と日本語学習者による「物語話段」の展開方法と表現特性の実態についてさらなる調査が必要である。

第 3 章 本研究の位置付けと方法

第 3 章では、本研究の位置付けを述べ、本研究における主要な分析単位の出典と概念規定、雑談の談話資料の収集方法と文字化の規則について記した後、本研究における「物語話段」の認定方法と分析方法について述べた。

本研究の分析単位として、まず、雑談を「談話」、つまり、コミュニケーションの最大の単位と見なす。また、「発話」とは、杉戸 (1987: 83) による「一人の参加者のひとまとまりの音声連続で、他の参加者の音声やポーズによって遮られるまでの間」という定義に従うが、本研究では、「実質的な発話」と、あいづちや間投詞からなる「非実質的な発話」に分けている。発話の情報量を測るために、「実質的な発話」は、他の参加者のひとまとまりの音声言語連続で遮られなくても、1 対の「提題表現」と「叙述表現」からなる「題-述関係」に基づく、「節」に相当する「情報単位」(佐久間 2003: 93) で認定する。「談話」と「発話」の間には、中間的なまとまりの話題を示す「話段」(佐久間 1987, 2003) という「内容上と形態上の相対的な一まとまりからなる機能的単位」(佐久間編著 2010: 17) があるため、それを用いて分析することとする。

「物語」とは、Labov (1972: 359-360)による「ナラティブ(narrative)」と、李 (2000: 8) による「物語」、Georgakopoulou (2007: 31-40)による「スモール・ストーリー(small story)」の定義を参考に、「連続する 2 つ以上の時間的に順序付けられた「節」(1 対の「提題表現」と「叙述表現」(佐久間 2003: 93)) からなる過去の出来事を再現する、または、過去・現在・未来に関する仮定の出来事を創造する語り」として定義する。過去に繰り返し起きる習慣的な出来事も、連続する 2 つ以上の時間によって順序付けられるものならば、「物語」とする。大小様々の「話段」の「多重構造」(佐久間、2009) からなる雑談における物語に関する話題のまとまりを「物語話段」と称するが、「物語話段」とは、物語るための交渉、登場人物の紹介、時間と場面等の背景知識の提示、語り手と受け手による「物語」の全体か一部に対する評価等を含む、「物語」に関する内容のまとまりである。「物語話段」が前後にある「非物語話段」との相対的な統括関係により、より高次の「大話段」を作り上げるものもある。

日本語母語話者 (以降、JNS と称する) と日本語学習者による「物語話段」の展開方法と表現特性を分析するために、【表 1】に示す全 24 種 (両場面各 12 種) の雑談の談話資料 (総 9 時間 58 分 25 秒) を調査データとして用いた。話者の条件を統一して、データを年齢が 20~30 代の女性の大学 (院) 生に限定した。また、初対面の場面では互いの身分や出身などの確認が多く、友人同士の場面のほうに物語が出現しやすいため、友人同士の場面に限定した。日本語学習者の母語と日本語のレベルを統一するため、中国語を母語とする、複雑な談話を学習

していると想定される上級日本語学習者（以降、CNS と称する）に限定した。

【表 1】本研究の分析資料：女性友人同士による雑談全 24 談話資料（約 10 時間）

場面	①筆者収集の雑談資料： 全 8 談話（約 259 分）	②『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2021 年 3 月版)』における雑談資料： 全 16 談話（約 340 分）
母語 場面	・ 4 談話（約 128 分）： 母語話者 1+母語話者 2	・ 8 談話（約 145 分）： 母語話者同士
接触 場面	・ 4 談話（約 131 分）： 母語話者 1+中国語を母語とする上級日 本語学習者	・ 8 談話（約 195 分）： 母語話者+中国語（大陸・台湾）を母語と する上級日本語学習者

具体的な分析方法については、次の【表 2】に示す。

【表 2】本研究の分析方法

「物語話段」 と「先行話 段」との話題 のつながり	<p>課題 1-1：「物語話段」と「先行話段」との話題の意味上のつながりを示す「話題展開機能」： A. 拡充的：「A1. 補足」「A2. 例示」 B. 多角的：「B1. 追加」「B2. 反復」「B3. 比較」「B4. 連結」「B5. 転換」 C. 論理的：「C. 進展」</p> <p>課題 1-2：物語を開始する際の談話標識（物語を開始する際に初出する命題内容の前に出現する間投詞・接続詞・文副詞・メタ言語表現）： 多用される談話標識／複数使用における使用順</p>
「物語話段」 の話題のまと まり	<p>課題 2-1：話題のまとまりを示す「物語話段」の「評価発話」の「統括機能」： a. 感覚的評価（a1. 属性 a2. 感情） b. 論理的評価（b1. 理由 b2. 帰結 b3. 提案）</p> <p>課題 2-2：物語を評価する際の談話標識（物語についての「評価発話」における文末モダリティ・あいづち）： 多用される談話標識／複合使用／無標使用</p>

本研究における「つながり」という概念は、永野（1986: 103）による「連接」と「連鎖」、「まとまり」という概念は、永野（1986: 103）による「統括」に基づくものである。まず、「物語話段」と「先行話段」との話題の「つながり」という側面からは、「物語話段」がどのように始まるのかを分析するために、「先行話段」との意味的なつながりを示す「話題展開機能」の使用傾向を分析し、物語を開始する際の「談話標識」を明らかにする。「物語話段」の話題の「まとまり」という側面からは、「物語話段」において物語がどのように展開してまとめられるのかを分析するために、物語に対する「評価発話」の機能の使用傾向を分析し、物語を評価する際の「談話標識」を明らかにする。最後に、雑談における JNS と CNS による「物語話段」の展開方法と表現特性の相違を場面と話者別に分析し、その結果によって日本語の雑談の会話教育の方法を提案する。

第 4 章 日本語の雑談における「物語話段」の基本類型

第 4 章では、日本語の雑談における「物語話段」の出現傾向と 1 物語話段当たりの平均発話量を示し、(1)物語の「内容」、(2)物語話段の「構造」、(3)参加者の物語話段への参加「態度」という 3 つの

観点から「物語話段」の基本類型を明らかにし、日本語の雑談における「物語話段」の多様性を示した。

全 24 種の日本語の雑談の談話資料から、全 436 例の「物語話段」が抽出された。「物語話段」が雑談の約半数を占めており、1 物語話段当たり平均して約 25 発話が用いられている。【表 3】に、3 種の観点別の日本語の雑談における「物語話段」の基本類型を示す。

【表 3】日本語の雑談における「物語話段」の基本類型

観点	分類	定義	
(1) 内容	事実性	体験型	過去に実際に体験した出来事についての物語 1.直接体験型：過去に直接経験したことを語る 2.間接体験型：過去に見聞きしたことを語る 3.心内体験型：過去の心内活動を語る
		虚構型	仮定の出来事についての物語
	共有性	個別型	語り手のみが体験した・する出来事についての物語
		共同型	参加者双方がともに体験した・する出来事についての物語
(2) 構造	要素の有無	完全型	「前置き」「設定」「出来事」「評価」の要素をすべて有する物語話段
		欠如型	「出来事」以外の要素が欠けている物語話段
	要素の位置	評価先導型	「評価」が最初に現れる物語話段
		出来事反復型	同じ「出来事」を繰り返す物語話段
(3) 態度	物語の進行権	語り手主導型	語り手が進行の主導権を担う物語話段
		受け手主導型	受け手が進行の主導権を担う物語話段
	受け手の協力度	協力型	受け手が協力的に参加している物語話段
		非協力型	受け手が非協力的に参加している物語話段
	受け手の同調性	同調型	受け手が語り手に賛成している物語話段
		非同調型	受け手が語り手に同意しないか反対している物語話段

注：「要素の位置」については、特徴的な例のみ示す。

(1)「内容」については、「事実性」と「共有性」という 2 つの観点から、どのような物語が現れやすいのかを分析した。特に、話者が直接体験したことの話が雑談に表現されやすく、語り手と受け手の相互作用によって構築される仮定の話もある。また、一方の参加者が相手に自分の体験を述べることがほとんどであるが、参加者相互が語り手となって共通の体験について語り合うこともある。

(2)「構造」については、物語の要素の有無とその出現位置という 2 つの観点から分析した。物語の要素の有無については、「前置き」「設定」「出来事」「評価」の全要素を有する物語話段もあるが、出来事以外の要素が欠けている物語話段も見られた。また、雑談では、語り手と受け手による物語に関する共通知識の多寡により、異なる展開方法を呈する。物語の要素のまとまりを示す「小話段」の出現位置については、受け手の興味や関心を引くために物語についての「評価」の発話のまとまりを先に示したり、物語の主旨を受け手に理解してもらうために、「出来事」の発話のまとまりを反復した

りするものが見られる。

(3)「態度」については、物語の「進行権」と受け手の「協力度」、「同調性」に焦点を当てた。主に物語についての情報を持つ語り手が主導権を握って談話を進めるが、受け手も「物語話段」の構築に参加し、一定の発話量を保っている。その中で、受け手が「実質的な発話」で「評価」を述べて、物語に協力的に参加し、語り手とともに一つのゴールに向かっていくというパターンが多く見られた。受け手は、語り手に賛成したり、反対意見を述べたりして、様々な振る舞いを見せている。

第5章 「物語話段」の「話題展開機能」

第5章では、市川（1978: 89-93）による「文の接続関係」と佐久間（1992、2002、2009: 112、2021: 235）による「話題統括機能」を参考にして、【表4】に示す全3類8種の「物語話段」の「話題展開機能」を、接続・提題・叙述・指示・反復・省略表現等の形態的指標によって分類した。日本語母語場面と日中接触場面におけるJNSとCNSによる「物語話段」の「話題展開機能」の使用傾向について、「物語」の開始方法（「i.自発」と「ii.他発」）別に分析した。

【表4】「物語話段」の「話題展開機能」

話題展開機能		定義
A. 拡充的	A1. 補足	先行話段の理由の提示や説明のために物語を語る (A←a)
	A2. 例示	先行話段の具体例を挙げるために物語を語る (A=a)
B. 多角的	B1. 追加	先行話段に並列する物語を語る (a1+a2...)
	B2. 反復	先行話段の主旨に類似する物語を語る (a1+a1'...)
	B3. 比較	先行話段に対比する物語を語る (a1↔a2)
	B4. 連結	先行話段と語句の連結が見られる物語を語る (a ↓ a α / a - a α)
	B5. 転換	先行話段と全く異なる話題の物語を語る (a ↓ b)
C. 論理的	C. 進展	先行話段を踏まえて物語を語る (a → A / a Z A)

分析の結果、JNS（いずれの場面でも）とCNSがいずれも、物語の開始方法については、語り手自らが始める「i.自発」（約9割）のほうが圧倒的に多い。これは、雑談で物語を想起した人が自ら語るのが自然な流れであるためと考えられる。「i.自発」の「物語話段」の「話題展開機能」の使用傾向については、次の3点が明らかになった。

①JNSは、日本語母語場面では、「A1.補足」（3割以上）の機能の物語を用いて「先行話段」の内容をより膨らませたり、「B2.反復」（1.5割以上）の機能の物語を用いて「先行話段」の主旨を繰り返したりすることが比較的多く、全く異なる話題を示す「B5.転換」（0.5割以下）の機能の物語をほとんど用いない。これは、JNSが物語を用いて、先行文脈を分かりやすく説明したり、相手の物語を受けて共感を示したりすることが多いことによるものである。

②JNSは、日中接触場面では、母語場面と比べると、相手のCNSと主旨が共通する「B2.反復」の機能の物語を用いて共感を示す物語が有意に多い ($p < .05$)。JNSがしばしばCNSに寄り添って、類

似する経験を語って気持ちを共有し合うのは、CNS への配慮が根底にあるからではないかと考えられる。

③CNS は、日本語母語場面の JNS よりも、「先行話段」の語句のつながりだけの「B4.連結」の機能の物語が有意に多い ($p<.05$)。これは、CNS が談話全体の内容を把握しきれず、先行内容の一部にしか関連しない内容を新たな話題として取り上げるためであると考えられる。

以上の結果から、JNS が話題のつながりを意識して、「先行話段」の主旨を踏まえた物語を始めるのに対し、CNS は文脈を意識せずに、唐突に物語る傾向があることがわかった。これは、CNS の日本語能力の不足、また、母語である中国語の談話スタイルからの影響によるものと考えられる。

第 6 章 物語を開始する際の談話標識

第 6 章では、日本語母語場面と日中接触場面における JNS と CNS による物語を開始する際の談話標識（物語を開始する際に初出する命題内容の前に出現する「間投詞（感動詞やフィラー、あいづちなどを含む）・接続詞・文副詞・メタ言語表現」）の使用傾向を、「物語」の開始方法（「i.自発」と「ii.他発」）の別に分析した。その結果、次の 3 点が明らかになった。

①JNS は、日本語母語場面では、1 物語話段当たり平均で、1 談話標識を用いる。「i.自発」（3 割強）と「ii.他発」（約 15%）のいずれも、「なんか」を最も多く用いる。「i.自発」の開始の場合は、「でも」、「で」、「そう」、「あ」も多く使用する。「ii.他発」の開始の場合は、質問を受けてから物語を語るまでに、情報処理や話者態度を示す「あ」「あー」「だから」などの談話標識も多く使用する。「メタ言語表現」はほとんど用いられない（2%未満）。物語を開始する際の談話標識の使用順については、いずれの場面でも、基本的には、「①先行文脈への反応」→「②物語の想起」→「③先行文脈と物語との接続関係の表示」→「④後続文脈の物語に対する捉え方の表示」という提示順が認められた。「情報の検索」を表す談話標識は、いずれの箇所にも自由に出現する。談話標識が多用されるのは、話者の態度の強調や言葉探しのための時間稼ぎ、発話内容の修正のためであることが考えられる。

②JNS は、日中接触場面では、母語場面と同様の傾向が見られた。

③CNS は、JNS よりも談話標識の使用が少ない。特に、JNS が多く使用する「なんか」と「そう」が少ないが、「i.自発」の開始の場合は、「あと」の使用が目立ち、JNS が用いない、不自然な「そして」と「ちょっと」の使用もあった。加えて、談話標識の複数使用が母語話者よりも少なく、母語話者の使用順とは異なるケースも見られた。

以上の結果から、JNS は、物語を雑談に導入する際の心的手続きを非実質的な言語的指標によって相手に知らせるなど、談話が円滑に進められるように心がけるのに対し、CNS は、それが欠けていることがわかった。これは、CNS が日本語の談話における DM の使用が十分に習得できていないか、母語である中国語では DM を使用せず、もしくは、異なる DM を使用することによるものと考えられる。

第7章 「物語話段」における「評価発話」の「統括機能」

第7章では、日本語母語場面と日中接触場面における JNS と CNS の「物語話段」における「評価発話」の「統括機能」の使用傾向について分析した。

「評価発話」は、その表現形式によって、「実質的な発話」と「非実質的な発話」の2種類に分かれる。実質的な「評価発話」については、CNS は、語り手と受け手がいずれも、母語場面の JNS よりも実質的な「評価発話」が有意に少ない（いずれも $p<.01$ ）。これは、実質的な「評価発話」の使用が CNS にとって難しいため、JNS が、CNS に代わって評価を述べることによるものではないかと考えられる。CNS に少ない実質的な「評価発話」の「統括機能」については、【表5】に示す全2類5種に分類し、評価者（語り手と受け手）別の使用傾向を分析した。

【表5】「物語話段」における実質的な「評価発話」の「統括機能」

分類		定義
a. 感覚的 評価	a1. 属性	物語に対する面白い、つまらないなどの物語自体の良し悪しを示す発話
	a2. 感情	物語に対する嬉しい、悲しい、恐ろしいなどの話者の気持ちを示す発話
b. 論理的 評価	b1. 理由	物語の結果が生じた原因、根拠、前提についての推測を示す発話
	b2. 帰結	物語の結果から導かれる結論、または、抽象化を示す発話
	b3. 提案	物語の結果に基づく助言、勧誘、依頼などの働きかけを示す発話

分析した結果、以下の3点が明らかになった。

①JNS は、日本語母語場面では語り手と受け手のいずれも、「a1.属性」の「評価発話」が最も多く（5割以上）、次に「b1.理由」と「b2.帰結」が多く（合わせて3割以上）、「a2.感情」と「b3.提案」はほとんど用いられない（いずれも1割以下）。また、単一の「物語話段」に複数の「評価発話」が用いられる例も見られる。「a1.属性」の「評価発話」は、「比喩」と「反語」などの使用が多い。

②JNS は、日中接触場面では、語り手の場合、母語場面との大きな違いは見られない。一方、受け手の場合は、語り手の CNS の代わりに、「b1.理由」の「評価発話」で出来事の結果について解釈する傾向がある（母語場面よりも0.1%水準で有意に多い）。これは、語り手の CNS がなぜその出来事が起こったのかについて示していないことによるものか、代わりに、受け手の JNS が談話を深めていることによるものではないかと考えられる。

③CNS は、語り手の場合は、母語場面の JNS よりも「a1.属性」($p<.01$)と「a2.感情」($p<.05$)の「評価発話」が有意に多いが、「b1.理由」($p<.01$)と「b2.帰結」($p<.05$)の「評価発話」は有意に少ない。また、「a1.属性」の「評価発話」は、「属性形容詞」による評価が大半を占める。つまり、JNS は CNS よりも、出来事の裏付けや解釈、もしくは、結果から得られる結論や発展することを推測する傾向があるのに対して、CNS は JNS よりも、出来事の内容自体の良し悪しについて批評した

り、心情を相手に吐露したりする傾向がある。

以上の結果から、JNS は、雑談の「物語話段」では修辭的な表現を駆使して、様々な角度から物語に対する評価を示し、中でも、物語に対する共感の構築を図るプロセスとして、物語の結果を導く理由や、結果から導き出される帰結という、一步踏み込んだ評価を取り上げて述べ合うことが多いが、CNS は、雑談の相手に対して、感想や感情を直接に伝える傾向があることがわかった。このことから、JNS は、CNS よりも出来事に対して統括力の強い評価を用いて物語を継続し発展させたり、完結させたりすることが窺える。これは、接触場面における話題の制約が一因として考えられるが、CNS による日本語能力の不足、あるいは、日中の文化背景の相違に起因するの否かについては、今後更なる検討が必要である。

第 8 章 物語を評価する際の談話標識

第 8 章では、日本語母語場面と日中接触場面における JNS と CNS の物語を評価する際の談話標識を、日本語記述文法研究会(編) (2003) を参考とした実質的な「評価発話」における「文末モダリティ」(【表 6】) と非実質的な「評価発話」に用いられやすい表現の別に、その使用傾向を評価者(語り手と受け手) 別に分析した。

【表 6】 実質的な「評価発話」における文末モダリティの分類

分類		表現形式
1. 当為		なくてもいい、～ほうがいい、～ばいい、べきだ
2. 認識	2.1 断定	Φ(無標)、だ、です
	2.2 推量	だろう
	2.3 確実性	かもしれない、にちがいない、はずだ
	2.4 証拠性	(し・する) そうだ、らしい、ようだ、っぽい、くらいの、的な、みたいな、感覚、みたいな感じ、という感じ(がする)、という気がする、というイメージ、って、っていう、っていうか、とか
	2.5 疑問	か、かしら、じゃないか
	2.6 思考	(と・って) 思う、考える、感じる、悩む、わかる
3. 説明		のだ、わけだ、ものだ、ことだ
4. 伝達		な、ね、よ、よね、わ、でしょ、じゃん、じゃない↑、くない↑、の、もの、～けど、～から、～のに、～し、～て

分析の結果、以下の 3 点が明らかになった。

①JNS は、日本語母語場面では、語り手の場合、実質的な「評価発話」において、相手の理解を促進するために、「って感じ」や「みたいな」などを用いて、評価内容を具体化して述べる傾向がある。また、出来事を経験した時にどのように思ったのか、あるいは、それについて現在どのように思っているのかを、「と思う」を用いて示すことが多い。さらに、物語が生じた原因について、「～んだ」を用いて解釈を述べたり、複合モダリティを用いて自分の発話を引用するなどの、生き生きとした表現

で評価を述べたり、自分の意見と距離を置いて、断定を回避したりする。また、非実質的な「評価発話」については、受け手の評価に対する同意を示す「そう」を最も多く用いている。受け手の場合は、物語を聞く際に、実質的な「評価発話」において、「～んだ」を用いて即時に物語をどのように理解したのかを示し、また、終助詞の「～ね」などを用いてどのように感じたかについて、語り手に共感を求めようとする。非実質的な「評価発話」については、物語の内容を理解したということを示す間投詞の「あ(一)」を多用する。語り手と受け手がいずれも、文末モダリティを用いずに評価を述べることもあるが、その際、一語文や反復表現のような、高い即応性と能動性を表すものが多い。

②JNS は、日中接触場面では、母語場面との大きな違いは見られない。ただし、CNS の日本語能力に配慮するせいか、受け手としては複合モダリティを用いて評価を述べるのが、母語場面よりも有意に少ない ($p<.01$)。これは、非対称的な談話スタイルにより、語り手と受け手が互いに物語について推測しながら相手に共感を求めるやり取りが、接触場面では少ないためではないかと考えられる。また、「自己引用」などの修辭的な手法を使用せずに、簡単で理解しやすい日本語に調整している可能性も考えられる。

③CNS は、総じて JNS よりも、文末モダリティを用いずに断定して評価を述べるが多く、複合モダリティを用いて自身の発話を引用して評価を述べることも少ない。「～んだ」が使えずに、「と思う」が本動詞に近い用法となっており、「自己引用」の用法を多く用いる JNS とは大きな違いがある。断定して評価を述べる場合は、評価を表す形容詞を多用する。また、受け手の JNS の「評価発話」を受ける際に、「うん」や「はい」を用いて同意を示すことが多い。これは、語り手の JNS の発話に促されて評価を述べたりするように、接触場面における物語話段の展開スタイルが母語場面と異なることや、CNS が日本語の談話スタイルに慣れていないこと、また、日本語力の不足によるものと考えられる。

以上の結果から、JNS は、物語に対する評価を雑談の相手と共有する際に、率直に伝えるための無標モダリティの評価や、婉曲的に伝えるための複合モダリティの評価などの様々な表現を用いて、自分の感情表出や意見提示を強調したり和らげたりするが、CNS にはほとんど使用されないことがわかった。これは、JNS の発話に促されて評価を述べることや、共感し合うことを好む日本語の談話スタイルに CNS が慣れていないこと、また、CNS が「～んだ」が使えないという日本語の制約によるものと考えられる。

第 9 章 「物語話段」の展開方法と表現特性に基づく日本語の雑談の教育方法

第 9 章では、第 5～8 章で明らかになった JNS と CNS による日本語の雑談における物語話段の展開方法と表現特性の違いとその要因を整理し、CNS が、雑談の中で物語話段を形成する際に、先行話段との話題の「つながり」や、物語内部の話題の「まとまり」を欠くこと、さらに、これは、日本語の会話教育において、「談話」と「発話」の中間に位置する「話段」という単位の教育が不十分な

ことを示唆するということを述べた。

そこで、日本語の会話教育では、「話段」という概念を用いて、「物語話段」における話題の「つながり」と「まとまり」に基づく教育が必要である。物語話段の「話題展開機能」と「評価発話」の統括機能、および、それらを支える談話標識に基づく、日本語の雑談の会話教育の方法としての可能性を述べ、具体的な教育方法を示した。「物語話段」の雑談の談話展開上の機能を理解させる必要があり、「先行話段」から「物語話段」にスムーズに移行するための表現を習得させる必要がある。また、統括力の強い「評価発話」の意義と談話展開上の機能を理解させる必要があり、「評価発話」における様々な表現方法を習得させる必要がある。

第 10 章 本研究の結論と今後の課題

第 10 章では、本研究の各章の概要と結論、その意義と今後の課題について述べた。

本研究では、「話題を広げたい、深めたい」という日本語学習者の日本語の雑談学習の要望に応えるために、話題の「つながり」と「まとまり」という 2 つの観点から、日本語の雑談における JNS と CNS による「物語話段」の展開方法と表現特性を分析し、話題の「つながり」と「まとまり」に基づく雑談の会話教育の方法を提案した。その結果、本研究の第 1 章で設けた 3 つの研究課題について、以下のような結論が導き出された。

結論 1-1 日本語の雑談における「物語話段」は、様々な話題の「つながり」によって「先行話段」から展開している。その中で、JNS は、「先行話段」の内容をより詳述したり、さらに先へと進めたり、共感を示したりするために、「物語話段」を用いることが多い。一方、CNS は、「先行話段」に出てきた特定の語句にのみ関連する話題の物語を提示するため、「先行話段」の主旨とは異なる「物語話段」が形成されるという傾向がある。

結論 1-2 間投詞・接続詞・文副詞などの談話標識が用いられることがある。その中で、JNS は、「不確定性」のある過去の出来事の提示か、「言葉探し」を表す言語的手段としての「なんか」や、先行発話に対する同意を示す反応、「思い出し・思いつき」、考察中などを表す表現としての「そう」を多く使用し、談話標識の複数使用には、一定の提示順が認められる。一方、CNS は、JNS よりも談話標識の使用が少なく、「そして」や「ちょっと」などの不自然な使用も見られる。

結論 2-1 日本語の雑談における「物語話段」は、語り手と受け手による様々な統括機能を有する「評価発話」によって、話題の「まとまり」が表現される。その中で、日本語母語場面では、参加者相互の共感を構築するプロセスとして、物語の結果を導く理由や、その結果から導き出される帰結という、一歩踏み込んだ評価を述べることが多い。一方、CNS は、物語についての感想や感情を直接に伝える傾向がある。

結論 2-2 文末モダリティやあいづちなどの談話標識が用いられることがある。その中で、JNS には、語り手（「って感じ」や「みたいな」、自己引用の「と思う」、解釈を示す「～んだ」など）と

受け手（理解を示す「～んだ」、「～ね」、「あー」など）がそれぞれに使いやすい談話標識があり、複数使用や不使用により、参加者の様々な伝達態度が窺える。一方、CNS は、JNS よりも談話標識の使用が少なく、本動詞に近い用法の「と思う」や、あいづちの「うん」と「はい」を用いることが多い。

結論 3-1 日本語の雑談の談話において、JNS と CNS には、「物語話段」の展開方法と表現特性に大きな違いが認められるため、その違いをもとに、学習者に「話段」を理解させ、様々な「物語話段」の展開方法とその表現方法を提示する必要がある。

結論 3-2 中級から上級レベルの CNS に対する会話授業における「物語話段」の教育の実践方法について一案を示した。11 のタスクを含む 4 つの案を用い、学習者に語り手と受け手として交互に練習をさせることで、相手と共に「物語話段」を構築していくことについての理解が深まり、表現力が向上すると考えられる。

本研究の意義は、①「物語話段」と「先行話段」との外部の意味的なつながりを示す「話題展開機能」と、「物語話段」の内部のまとまりを示す「評価発話」の機能の分析を通して、話題の「つながり」と「まとまり」に基づく日本語の雑談の展開方法を解明できたこと、②物語を開始・評価する際の談話標識の分析を通じて、日本語の雑談における非実質的な言語要素の使用方法や使用効果の分析を深めることができたこと、③談話の基礎的研究をもとに、日本語の会話教育に具体的な方法の提案ができたことにある。

今後は、話者の親疎関係や性差などを考慮して分析対象の範囲を広げ、本研究では扱えなかった雑談の参加者の「非言語行動」や心理などの観点を取り入れて研究を深めていく必要がある。また、日本語教育の現場で実践を重ね、学習者の母語や背景を活かした教育方法を模索しなければならない。

4. 総評

本論文の目的は、日本語の雑談における「物語話段」について、話題の「つながり」と「まとまり」による文脈の展開方法と表現特性を「談話分析」の結果に基づき、日本語の雑談の会話教育の方法として提案することにある。全 10 章、本文 A4 判の計 374 頁と別冊資料計 372 頁からなる 2 類 24 種の日本語母語と日中接触場面の雑談の対話資料を用いた大部の論述を通して、日本語学と日本語教育学、かつ、日本語の文法論と文章・談話論という複数の研究領域に関連する意欲的な研究である。

本論文の成果として、以下の 5 点が指摘できる。

1. 日本語の雑談の談話を構成する「物語話段」という分析単位を導入して、「内容」「構造」「態度」の三観点から分析し、日本語母語話者 JNS と中国人上級日本語学習 CNS による日本語の雑談の表現方法の異同を解明した。
2. 【表 4】「物語話段」の「話題展開機能」3 類 8 種として、市川(1978)の「文の接続関係」を一部改変し、「先行話段」との外部の意味的なつながりを分析して、日本語の雑談の物語を開始する

際の「談話標識(間投詞(感動詞やフィラー、あいづちなどを含む)・接続詞・文副詞・メタ言語表現)」の使用傾向を明かにした。

3. 【表 5】「物語話段」における「評価発話」の「統括機能」2 類 5 種を設定して、市川(1978)の「文の接続関係」と佐久間(2003, 2021 等)の「中心発話・中心文」の「話題統括機能」を参考に、「物語話段」の内部のまとまりを分析し、物語を評価する際の談話標識として、【表 6】「実質的な「評価発話」における文末モダリティの分類」の使用傾向を明かにした。
4. 日本語の雑談における「物語話段」の展開方法と表現特性の違いをもとに、中級・上級の日本語学習者対象の雑談の物語話段の会話教育の教材と指導案を提示した。
5. なかでも、個々の表現形式の雑談談話内での機能を論じた第 5 章から第 8 章の議論は意欲的かつ重要なものである。特に「談話標識」(ディスコースマーカー (DM))と談話展開の関わりを扱った第 6 章の議論は、狭義の文法領域での DM の理解を踏まえ、細やかな議論を展開するとともに、文法研究に対してフィードバックを行うことも可能な議論となっており、文法研究と談話研究の対話の可能性を示唆するものとなっている。

一方、複雑多様な「雑談」の「物語話段」の談話構造に対して、より説得力のある成果を導くには、以下のような課題も指摘された。

1. 「物語話段」と「非物語話段」の文脈展開による多重構造について、文章・談話論の知見に基づき、「話段」の認定基準を明確に示す必要がある。別冊資料には、全 436 例の「物語話段」について次元の区分と番号が記されるのみで、前後する他の話段との文脈展開の種類が明示されていないが、佐久間(2002, 2003, 2009, 2021)の「話題統括機能」(文脈展開機能・話題展開機能)全 3 類 14 種に基づき、雑談の談話を構成する「話段」の「中心発話・中心文」による相対的な統括機能を形態的指標とともに明示する必要がある。
2. 分析した物語話段の要素を示し、語り手と受け手の区別がしやすい方法で示す必要がある。また、本論中に、全ての要素を明示している物語の例がないため、読者が分析を確認する手段がない。代表的な話段を含んでいる談話(物語話段とその前後の話段)を具体的に示し、その談話や物語の話段の中の(一個の要素ではなく)全ての要素を記し、それぞれの要素と談話の流れの中での他の要素との関係を説明する必要がある。さらに、論文内で統計的分析を多用しているが、その数を計算した際にどの発話をどのように数えたかの説明も示しておくべきである。今後同様の分析をしたい読者の助けにもなるよう、以上の点に配慮した書き方をしてほしい。
3. 【表 4】「物語話段」の「話題展開機能」3 類 8 種は、先行文脈から物語話段を開始する「文間文脈」のみのつながりを示すもので、先行文段と物語話段との話題のつながりは、文の接続関係と段の統括関係に基づく複数の大小の話段の多重構造から捉えられる。また、物語を開始する談話標識は、「間投詞(感動詞やフィラー、あいづち等)・接続詞・文副詞・メタ言語表現)」以外にも、

指示詞や提題表現・叙述表現・反復と省略表現等にも話題展開機能がある。これらも含めた更なる分析により、より精度の高い成果が示せることと思われる。

4. 【表5】「物語話段」における「評価発話」の「統括機能」2類5種は、先行研究の「話題統括機能」とは異なり、「物語を評価する」ものは、「物語話段」と「非物語話段」の「中心発話・中心文」による話題をまとめる機能であるが、その談話標識は、実質的な「評価発話における文末モダリティ」の他に、非実質的発話にも物語話題を統括する機能があるのではないか。
5. 「評価発話の統括機能」の定義とその認定基準等が明確に説明されていない。統括とはもともと文章論に出自があるが、取り上げているのは数発話のみであり、先行研究のように多重構造や中心発話との関係等という方法論を取っていない。【表6】の「実質的な「評価発話における文末モダリティ」を従来の Discourse Marker の研究と関連付けて「談話標識」と分類する根拠を述べる必要がある。一口に評価発話や文末モダリティ形式と言っても、その中身はさまざまであり、談話展開との関わり方もそれに依じて多様であるということであろう。一方、談話では参加者の役割（たとえば語り手か受け手か）によって発話機能が異なるため、文法論の分類をそのまま談話分析に用いるのではなく、より詳細な枠組みが必要ともなろう。さらに、このような研究には、身振り手振り・表情・頷き・視線・声のトーンやイントネーション等の音声的要素を含めた「非言語行動」にも着目した分析が必要となり、そのためには、雑談の映像資料をデータとして活用するなど、新たな分析方法が求められる。

以上の課題は残されているが、これらの点を今後の研究に生かすことで、一層の進展が期待される。本論文を総合的に判断し、審査員一同、本論文は博士（学術）を授与するに値するとの結論を得たことを、ここに報告する。

以上